



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第四十五号(一日発行)
平成五年六月一日

北海の古平風土物語 (十一)

阿波萬先生をしのんで

高橋源五郎

阿波萬先生の没後六十年程たって、同窓生や町の有志が心を込めて、古平町墓地の入口に靈碑を建立した。この碑文を揮毫したのは曹洞宗福管長で、札幌市中央寺住職・福井天章氏であるという。

今でもお盆になると、墓前には先生を慕う人たちの捧げるご焼香の煙が絶えることがなく、

特に年配者や長老のお参りが多い。阿波先生は、母校古平小学校の生徒だけの先生ではなく、広く古平町民みんなの先生であつたのだなあと、心から尊敬しているのである。

ご生前のご薫陶、立派な社会教育精神が永久に残ることを願いながら、私も墓参を続けている末輩の一人である。

ならぬ堪忍するが肝心 上

担任・故岡部哲美先生のこと

この年(大正十年)四月、三年生に進級した。入学して初めて男の先生(岡部哲美先生)に受け持たれた。

先生は短軀で五分刈り、額は武士型にはげ上がり、ゴマ塩に見える固い短いひげはガンゼの

のようにバリバリしていて、眼光がけいけいとして鋭く、一度大喝すれば、教室や運動場が割り裂けるように辺りに響いた。

これを聞くとき身がちぢむ程の思いをした。しかし、一度笑うと温情があふれ、腕白な悪童連中

もことごとくなつき、みんなから敬慕される評判の名物先生であつた。

私たちの学級は、三年男子一列と四年女子三列という男女一緒の複式学級であつた。「尋三・四年は組」と言つた。日ごろから先生は、「三年男子は四年生を姉と思ひ、言うことを良くきけよ。四年女子は三年生を弟と思ひ、良く面倒をみよ。みんなは一家の姉弟であつて、先生はお父さんだよ。」と言うのであつた。

また「男子はパッチだめ、鏡

その二

「蝦夷地の犬のこと」①
アイヌは犬のことをセタという。家ごとに犬を飼つていて、山へ獵に出かける時は必ず犬を連れていく。

熊を見つけると矢を射かけるが、矢が当たると熊はアイヌの方に向かって襲つてくる。すると犬は熊に向かつてほえかかり、熊のうしろにまわつてその尻にかみつく。犬と熊が争っている間にアイヌは次の矢を射る。こ

うつしだめ、嘘つき法度」「女子は飛び跳ねだめ、陰口だめ、泣くこと法度」と諭し、繰り返していた。

たまたま頭痛、腹痛などの者が出ると、教壇に寝かせて催眠術をかけて治してくれる医者いらずの先生で、神様のようなであつた。ときに禁を破る者や嘘をつく者がいると、催眠術にかけて白状させる。泣いて謝る者もあつた。



うして熊を仕留める。

一般に蝦夷の犬は勇敢で、人なつこい。あるとき運上屋の支配人が、用事があつてとなり村まで行き、その帰り道に財布を落としたことがあつた。家に帰つてから気がついたが、連れていった犬を見ると口からひもを下げてゐる。よく見るとそれは自分の落とした財布であつた。犬は、主人の落とした財布をくわえたまま家まで帰つて来たのである。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

『あの世』も

—— また楽し…：か

兄、敏雄が死んで五十年になる。過日、五十回忌を修し自らを慰めている次第。無宗教に近い私も七十三歳ともなれば、死ぬ日の近いことも自然と考えるようになるものだ。

日本人は一般的に、肉体は地に還るが魂はあるものと考えている。否、信じている人の方が多い。人が死ぬと魂が抜け、魂はあの世へ行く。どうもあの世とは西の方を指すようだ。少し

故郷を想ひ 福井孝平

その方の本を読むと、死んで七日は家の中の鴨居でウロウロしている。それから七日ぐらいたって執着が抜け、ふるさとの愛する好きな山里へ行く。私ならさしずめ古平のスキー場かもしれない。

ここで三年ぐらい遊んで、ご先祖様が待っている西方の空に還る。たぶん母と兄が「おまえも来たか。よしよし、極楽の方へ案内してやるぞ」と、喜んで

迎えてくれる思う。大変楽しい『あの世』らしい。そして、ときどきこの世に魂だけ還ってくる。お盆とかお正月とか、そしていっしょに子どもや孫などなど食事をしたり、心配ごとを聞いてやったり、これを共食の儀式と言うんだそうです。

あんまり長くいると迷惑なので、三日ぐらいでまたあの世へ還る。そして陰ながら、末永く子孫の幸福を祈るそうである。ここまで勉強したら、これはいい事だと思いませんか。ただ気になるのは、自分だけ極楽では地獄に行く人が気の毒なので

私は、極楽でも地獄でもないあの世(天国?)で結構ですからときどき子孫の顔を見に來たいと思っています。まあ、一時帰国みたいなものです。ところが一時帰国でなく、永久帰国するときがあるそうです。

ここからがおもしろい。梅原猛という哲学者がやさしく書いていますので、次回もう少し勉強して書いてみたいと思っております。

海の魔神伝説

婦女禁制の神威岬

食べ物もなく生活に困った人たちは、仕方なく家族を連れて西蝦夷地(日本海岸)へやって来た。また松前地方へ来る者もあつたが、以前から松前藩は、福山(松前)・江差・箱館(函館)に沖の口番所という海の関所を置いて、出入りする人々や荷物を検査し、はつきりした職業をもつていて、身元引受人がある者でなければ滞在を許さな

唐黍にもぎたてという言葉添え屋根草を刈り開拓の寺ここに水見 句丈

浜宿の昔網元大夏炉 雑木山こぶしの花のひとつとところ 斉藤 波留

ゴルフ場むかしスズラン摘みし丘 仲谷 美砂

孫入園可愛相ともうれしとも 福井 幸平

■おむすびと訂正 (誤) 若柳や古平橋のたもとよ 斉藤 波留

ねこ柳古平橋のたもとより 斉藤 波留

かつたし、そうでない者は追いつけずのがきまりであつた。今回は事情があることなので、それらの人たちには藩から少しの金と食糧は与えたが、やはり帰すことにした。

しかし、中には夜中にこっそりと渡つて来て、親戚や知人を頼つて救助を求める者もあり、ここから西蝦夷地に向かう者もあつた。

これらの人たちが、航海の危険をおかしても西蝦夷地に行くのには理由があつた。それは、なんといいつも鯨、その他の魚類が豊富にとれることから、たとえ米穀類が不足しても、なんとか命をつなぎとめることができるだろう、という考えがあつたからである。

生活に困つた人たちは次第に南方から北方へと移つて行つたが、婦人を連れて来た人たちは神威岬を越えることができず、仕方なく、みんな古宇から南の場所にとどまらなければならなかつた。(以下次号)

継承

古平

古平青年会結成

古川 義雄

2

想えば、戦後のカオスの中から新しい我々の生き方はどうあればいいのか、みんな痛切に模索していたのだ。古平町のように、とりあえず明日食べるものに困らない環境ではあっても、いやそれだけに若者たちにとっては、いち早く先に青空が見たかった。

日本民族全部が、十把ひとからの路線に乗せられ、あつという間に脱線し、さあ一人で勝手に歩いて行きなさいと、荒野に投げ出されたに等しい。

それでも、進んでいた方向が間違っていないのならまだしも、百八十度違っていたとなると、純粹に信じていた若者たちは哀れであった。まちには復員くずれ、特攻くずれが怒りをぶつけて歩いていて。

その頃、聞き慣れない「民主主義」という言葉が新しい価値観の主流となっていたが、そんなコトバだけに合わせて青年たちの進路を舵取りすることな

ぞ、容易なことではなかった。

この時期、孤独に耐えて一人生き抜く若者なんかいなかったはずだし、若い体温を寄せ合っ

てともかく、お互い温まり合いたかったのだ。生まれたばかりの「古平青年会」会長として、その頃の私に指導理念などあるわけはし、私自身が仲間たちの中で温まりた

かったことだけは確かだ。しかし、長として会の中でのんびりしている暇はなかった。青年たちの中には「同志会」のイメージが強く残っていて、行動に力点を置き、何かやることを急いだ。

祭礼にタコの神輿を出し、飲んでケンカをして道路に放り出してしまった「タコ」を、幹部たちだけで惨めな思いをして持ち帰ったこともあった。

越後踊りの裏方にも徹した。やぐらの新調、電灯の配線、歌い手の婆さんたちの送り迎えやオヤツの用意。浴衣地の贈り物

水見悠々子句碑

建立有志代表

伊藤藤柏翠

の文章より

■建立の由来

古平は往古、古都という名を用いたのを目にした事がある。

僧円空留錫の作品も残り、又練の千石場所として文化の中心地であった。

鶯や、廿日本陣

A7番目屋

悠々子

の句の如く、産業、交通の近代化と練の漁獲の變化等によって本陣が番屋となり、現在は観光の為に大いに賑っている。

今、作者が本句碑の句によって古平の積丹文化の誇

早く始めるために、男女会員たちの中で私も踊っているうちに広大寺もできるようになった。



『せたかむい』を第一号から揃えてあります。ご希望の方は、文化会館内「町史編さん室」へご連絡ください。
☎ 4216590 教育委員会
☎ 4212181
役場・からつながります。

所 古平町文化会館前庭

建立年月日 平成二年七月七日

建立者 悠々子句碑建立有志

るべき歴史をなつかしみつつ、今後の町の産業文化の発展を烈々と願うのを覚えるのである。

平成三年七月七日

財団法人日本伝統俳句協会 副会長

伊藤藤柏翠

*水見悠々子の経歴その他については、『せたかむい』第四十一号「水見悠々子・寿男父子句碑」を参照

子・寿男父子句碑」を参照

二十世紀初めの《古平郡》完

（十口平市街）続き

▼衛 生

開拓使のころ、当地に出張病院が置かれたが後に余市病院に合併した。明治十五年に置かれた公立病院は、今は宮地某の私立病院になっていて、町村費から補助をして町村医を兼ねているが、このほかに開業医が二人いる。

飲用水は井戸水を利用してゐる所が多いが、その水質はあまり良くない。以前、伝染病が流行したことがあるが、近年もお毎年のように多少の腸チブス患者を出しているという。

▼社 寺

琴平神社は事代主命（ヒメノミコ）を祀って新地町にあり、慶應元年の建立で、明治八年に郷社に列せられた。

禅源寺は安政八年、新地町に創立され曹洞宗に属し、寶海寺は明治三年、新地町に創立し大谷派に属し、願雄寺は同十五年浜中に創立し浄土宗に属している。

▼地 理

東南は古平市街付属地に含まれ、西は厚舌岬で美国郡厚舌村に接し、北は海に面していて面積は甚だ狭い。山麓が崖で海に接している。人家は、崖を開いて段になって建てられている。古平市街とは、十数町離れている。

町民の勤勞奉仕の汗で建設

中島グラウンド竣工式

【△7日はこんな日】

[昭和12年]

昭和十一年六月、古平尋常高等小学校の保護者会役員会の席上で、「いまの本陣の干場（中央旅館の裏手にあった鯉粕の干場）では運動会をやるにしても狭いので、もっと広いグラウンドがほしい」ということが話題になり、それなら昔の「競馬場あと」がよいのではないかということ、その時には、地ならし作業に会としても尽力すること

て、道路は村の中央を通っている。

▼沿革

昔はこの字名を、トマリアサム、ヘロクカルシといっていた。ヘロクカルシとは、「鯉の群来する処」という意味であるという。

天保年間（百六十年程前）、請負人がここに番屋を建て、また本州からの出稼漁民の家が十数軒ばかりあり、明治初年に群来村と改称した。当時は、和人のほかにアイヌ

人九戸が住んでいた。五、六年ころから移住してくる者が増え崖の中腹に家が立ち並んだ。

▼戸数と人口

明治三十二年末現在、戸数四十三戸、人口二百六十一人で、青森県からの移民がその大半である。アイヌは二戸に減り、昔出稼ぎに来て今も住んでいるというのはわずか一戸である。

ではあったが川原なので石が多く、すべて人手に頼る作業なので苦勞をした。

古平町にも広いグラウンドがほしい、という町民の汗を流した熱い願いがみのり、十二年六月五日、延作業人員千三百人余り（ほかに人夫）の勞力奉仕により完成し、修祓式が行われ、中島グラウンドと命名された。

当日は小学校の記念運動会も行われ、三十数軒もの売店が出た。そして十一月、高野平治が寄贈したヤチタモの苗木を、高等科の生徒・先生、青年団員などの手によって植樹した。

しかしこのグラウンドも、戦時中の食糧難の時代にはイモやカボチャ畑になってしまったが、戦後になってさらに整備され現在のようになったのである。